

沖縄から 箱いっぱいの軽石

沖縄からダンボール箱にいっぱいの軽石が届きました。

昨年8月、小笠原諸島南部の海底火山「福德岡ノ場」が大噴火を起こしました。そのとき噴出した膨大な量の軽石は、1カ月間海面を漂って1300km離れた南西諸島まで到達し、島々の海岸や港を埋め尽くしたのです。本来は真っ白なビーチが黒い軽石でびっしりと覆われた様子は、テレビなどでご覧になったと思います。

ところで軽石は、どうして浮くのでしょうか？ 軽石をよく見ると、細かい穴が無数に空いていることが分かります。成分は普通の火山岩と変わりませんが、スポンジのように穴だらけでスカスカのため空気を含み、水に浮くほど軽いのです。この無数の穴は、サイダーの泡が凍ったものといえはイメージできるでしょうか。

火山の噴火を引き起こすのは、地下でどろどろに融解した熱いマグマ。その中には大量の水蒸気が溶け込んでいます。温度は全然違いますが、サイダーやビールに二酸化炭素が溶け込んでいるのと同じ状態です。サイダーの栓を開けると、圧力が下がることによって、溶けていた二酸化炭素がブクブクと泡になって噴き出します。マグマが地下から上昇してくる時

も、同じことが起きるのです。マグマが水蒸気でサイダーのように泡立ちながら地上に噴き出し、すぐに冷えて固まった——それが軽石なのです。

箱いっぱいの軽石は、沖縄県北谷町の学芸員 藤彰矩さんから送っていただきました。遠く離れた博物館同士で標本を交換することはよくあります。石狩浜にも軽石は漂着しますが、ほとんどは豊平川・石狩川から流れてきたもの。約4万年前の支笏湖周辺での噴火によるもので、福德岡ノ場の軽石とは色も形も違います。マグマの成分や噴火のタイプが違うためです。このように、遠く離れた地域の標本と比べて初めて、自分の地域の特徴が見えるのです。

沖縄の大量の軽石は漁業や海上交通、観光などに打撃を与え、現地の人々にとっては災難でした。しかし一方で、火山噴火や海流といった地球の活動や、地域の個性も教えてくれる役にも立つのです。

(志賀健司)



2021/8/13に始まった福德岡ノ場の大噴火。噴煙は成層圏に達した
(撮影/海上保安庁)



沖縄から送られてきた大量の軽石



穴の空いた軽石は、サイダーの泡が凍ったようなもの



8月に噴出した軽石は、10月には南西諸島に到達。その1カ月後には伊豆諸島などにも流れ着いた



沖縄本島に漂着した軽石の1つ。肉眼では見えないものも含めて、無数の穴が空いている

石狩市学芸員
志賀健司 Kenji Shiga

専門は地質学・漂着物学・海辺学。地球の環境の変遷などを調べるとともに、石狩の浜辺にどんなものが漂着し、それがどんな意味を持っているかを研究している。

岡文化財課 いしかり砂丘の風資料館 ☎62・3711 ※火曜休館